

「治験データ」を丹念に読み解き検証した小冊子

「抗認知症薬の不都合な真実」発売

抗認知症薬は本当に認知症に効くのか？を真正面から論じた小冊子『抗認知症薬の不都合な真実 治験データから読み解く「エビデンス主義」への疑問と提言』（価格550円）が現代書林から出版された。

2018年6月、フランス厚生省は、ドネペジル（日本での商品名アリセプト）をはじめ、4種類の抗認知症薬を保険適用から外すという衝撃的な発表を行った。

「これらの薬を使うことで症状の緩和、死亡率の低下といった良い結果が得られる証拠は不十分であり、一方、有害事象の多さは無視できない」という厳しい評価が下されたのだ。

しかし、日本国内ではこれらの抗認知症薬は依然として広く使われている。治験で承認されたのだから、エビデンス＝科学的根拠があるはずと評価するからだ。

本書は、統計学的に検討して有意差があるとするエビデンスは果たして完璧な真理なのか。薬の効き方は人によってまちまちで、誰にでも当てはまるとはかぎらないと断定的。各製薬会社公表の「治験

データ」を丹念に読み解き検証した結果、驚きの事実が……。

医学博士の長尾和宏氏とフリーライター東田勉氏の共著である。

